

## 平成24年度「災害ボランティアぐんま」総会・記念講演会 記念講演で東日本大震災を語る

平成24年度「災害ボランティアぐんま」の総会が5月12日に県庁において開催された。東日本大震災での活動など、23年度事業は多岐に渡ったが、収支報告及び24年度の事業計画、予算案等が承認された。

次いで記念講演では、ノンフィクションライターの中原一歩氏が、「熱意を力タチにする仕組み『石巻モデルの教訓』」と題し、ジャーナリストの目で見た東日本大震災における災害ボランティア活動の実態と本音を語った。

(一部を要約して次に掲載)

### ◆記念講演◆

こんにちは。ノンフィクションライター中原と申します。僕は3月11日が起こったとき、いったいこれはどうなるのだろうかというところで、一刻も早く被災地に飛び取材をしました。

混乱の中で、いろいろな情報が入って、我々が現場に行くと感じたことと、マスコミを通じて皆さんが見ている最大の違いはこの震災の現場、風景、ご遺体を見ているか、見ていないかだと思っております。

それからもう一つ、その現場の中で2〜3週間は大混乱をしたのだということ、それをマスコミは報じてないのですね。



そういうマスコミの中にながら、マスコミが何を報道して、何を報道しなかったのか、メディアが何を伝えて、何を伝えなかったのかというのを思い知らされました。

今回の震災の特徴として、唯一情報源になったのは携帯系のメディアでしたね。その携帯電話の中にはありとあらゆる情報が飛び交うので、現場では、どれが正しくて、どれが間違っているのか判断が付かないですよ。おそらく避難をされていた方も、情報に一喜一憂するというような状況が続いたので

はないかと思えます。

今回、私が入ったのがなぜ石巻市だったのかというのは、石巻市だけがボランティアを最初から来いと言っていました。来いと言っているということは、そこに行けば何か情報があるのではないかということで、日本海から山形県を経由して入ったのです。

そもそも、ボランティアを取材するというよりも、行政はどういうふうに関心しているのかということ調べたいと思いついて石巻市役所に行きました。市役所の周囲はすべて、津波によって冠水をしていました。当時、中には約400人の、避難された方と職員の方がおられました。約3日間の籠城です。水が徐々に引き出した後に、市役所の方が橋をつくり救出に出ていくというような状況でしたね。そんな状況の中で、災害ボランティアがどう動いたのかということも取材して、記事を書きました。

災害ボランティアは何かあったら、手助けになるうとして現地に行くというのとは当然とされているかもしれないけれども現地インタビューすると「ボランティアって、どこの国の人？」って言う人がいたので、ボランティアというのがわからないわけ、どこの国の方が、違う県の人がたくさんやってくる。自分たちを助けてくれるのだとは思っていても、その全体像が全くわからない。ボランティアはいついた誰なのか。責任者は誰なのか。ですから、ボランティアの方の受け入れを拒否される。石巻市だけが最初から受け入れられ

たのにはもう一つ理由があつて、石巻にいたある女の子が、「Twitter経由でソフトバンクの孫さんに、「石巻は今、電話がありません。電話が欲しいのです」と書き込みをした。そうしたら社員の方が翌日に、携帯電話とPCを持ってやってきて石巻専修大学の周りにアンテナを立てた。石巻の社協さんを含め、何人かのボランティアの人はそこで連絡先を入手したのです。当時、連絡先が載ってなかった、石巻がそれを最初に出しました。出したら日本中からその電話に殺到する。

社協の方が大体3〜4人おられまして、朝から晩までそれに忙殺されていく。これはやはり非常に大変だなと。押し掛ける方とそれを受け入れようとする側の人たちはこんなに大変なのかというのを思いました。

ここに、いろいろ問題があります。彼らは泊まるのか。誰がその生活面の責任者になるのか。けがをしたらどうする。そもそもボランティアは誰なのだ。地元の人に迷惑をかけたらどうするのだ。ボランティアのごみや排せつ物はどうするのだ、ですね。特に語られない現実というのは、最後のごみや排せつ物をどうするのか。

よく、ボランティアというのは、自己完結という言い方をしますが、その中で一番大変なのは排せつ物です。とにかくトイレがない。簡易トイレなんか行政、特に中央、東京の行政、土建屋さんが抑えてしまい、石巻市の災害ボランティアセンターは確保できないのですね。

一方、これもあまり報道されていま

せんけども、バキュームカーが残っていたのは、石巻市に11台だけですよ。ほとんどたまっていくけど回収できない。避難所もそうでしょうし、人間がそこにいる限りたまっていく。だから、我々記者も含めて思ったのですけど、やはり自己完結は嘘なのだなど。大なり小なり、地元へ負担をかけるということも承知した上で行かないと、地元の方がどれだけこれに苦労されているのか特にトイレの部分、ごみの部分は、今後考えないといけないと思いました。

阪神淡路大震災以降、震災でボランティアの受け皿がない、じゃあ災害時にボランティアの受け皿となるものをつくらうと。そこで、全国に組織があつて、かつボランティアと関係性のあるような社会福祉協議会に白羽の矢が立つて、基本的には災害ボランティアは、災害が起きたら皆さん社協に行くというようになるのですけれども、社協そのものが最初なかなか機能しなかつたという問題、これは社協がどうのということではなくて、社協の方も被災者なのだ、津波被害というのはそういうことなのだ。

一方、市民活動を円滑に進めるために、たくさんNGO、NPOというのが発生しました。その方々、スタッフの人たち、独自に集めた課題を持って行って、「なぜこれがやれないのか」「なぜすぐ動けないのか」という、フラストレーションがものすごかつたです。

個人ボランティアの受け皿としての社協というのは、非常に価値もありますし、存在意義も大きいと思いま

たけども、それをどうやって個人のボランティアの方を受け入れる仕組みとか、スキルを持つている団体とが、なかなか共存できないということを僕は横から見ている、大変だなと思ったのですね。

それで、石巻の人たちは何をつくつたかというところ、石巻災害支援連絡協議会という協議会をつくりました。社会福祉協議会とは別につくつたのです。ですから、一般のボランティアの方は社会福祉協議会に行ってください、NGO、NPOのいろんな目的を持っていく方は、その協議会のほうに行ってくださいと。協議会の方に行かれた方はそれぞれ、分科会に分かれて、それを吸収していくという仕組みをつくられたのですね。

それともう一つ、石巻モデルがよく機能していたのは、対策本部に代表者がそれぞれ参加していたということなのです。

例えば泥かきをしても、いろんな問題が出てくるのですけど、それを解決していくには、どういふふうに機能しているのかということ、やっている方がわからないと気持ちの中にフラストレーションがたまっていく。今回、社協の方と、災害支援復興協議会の方が、災対本部に自衛隊と並んで、ボランティアの代表がそういう会に入っておられるのは非常に大事だなと思う。1000人、2000人みたいな単位でボランティアの方が集まっていれば、あっという間に町をきれいにするので、あっという間にきれいになるのですけれども、そういったものを数で報告をしていく。す

ると自衛隊の方も最初は「何だ、このボランティアは」みたいなのもあつたと思いますが最後のほうは、自衛隊の方が持っている地図をボランティアの方も共有し、自衛隊の炊き出しは、100人分、200人分。あと残り20人残っておられたら、その20人分だけを炊けないという問題があつて、そういったときにボランティアとの連携がありました。これは面白いなと思いました。

石巻モデルの教訓の1つは、石巻でなぜボランティアがたくさん受け入れられたのか。それは受け入れる現場、環境があつたのです。その最大のポイントは、石巻専修大学が、ボランティアを受け入れる拠点になつたということです。大学の広い宿舎、運動場にテントを張って生活をすればいい。野球部の大きな室内練習場が物資倉庫になつた。それと、そこは大学の構内だったので、飲酒が駄目だとか、喫煙が駄目だとか、そういうルールが敷かれていて規律というものを保つたのじやないかと。

それから、先ほどもお話ししたボランティアの排せつ物、およびごみの処理。地元の方の負担は非常に大きいので、例えばボランティアに行かれた方は少しカンパを置いていくとか、ちよつと考えていただければなと思います。

それから、企業と災害時の連携ですね。企業の力というのは非常に大きいです。やはり町だけで何かをやっていくというのは無理で、国に至っては遅いんですね。やはり非常時前から

企業と災害時の連携というのは大事かなと思います。

最後ですけれども、ボランティアとお金という部分ですね。津波で家が全部流されてしまった、車も流されていた。1000人からの人を受け入れるために仮設トイレを借りるにもお金がかかる。その協議会でお金を出し合っただけかやればもう5000万円以上の話になるのですね。

私も横で見ている不思議だなと思ったのは、石巻がなんでこれだけボランティアを受け入れたのかということと同時に、誰がお金を出したのだから。

## 東京都・目黒区合同総合防災訓練

東京都・目黒区合同総合防災訓練が、9月1日(土)、同区の林試の森公園で実施され、会員ら13人が参加し、「医療救護班活動訓練」に従事した。

### 訓練の積み重ね

今井 賢治(高崎市)

9月1日早朝より「平成24年度東京都・目黒区合同総合防災訓練」に参加しました。

高崎の自宅を自転車で午前5時過ぎに出て、約40分かけて集合場所の新前橋駅西口の公園脇へ急ぎました。

参加者全員が揃い、予定時刻前に東京へ向かいました。関越自動車道経由で都内へ入り、目黒区下目黒五丁目の「林試の森」会場へ午前9時に到着。まさに訓練が始まるうとしていた状況で、担架搬送係の部署へ急ぎました。

9時半から第一回目の搬送訓練が始

うかと。最終的に地元の方が、ポケッタマネーでいろいろされているわけです。

これをどう考えていくかということだと思つたのです。やはり我々、駆け付ける側というのは、体さえあれば、何でもそこで役に立つし、いろんなことができる、災害ボランティアには意味があるというふうにも思つたのですけれども、やはり、お金がかかる。だからボランティアを語るときに、そのお金、活動の部分にどうしても、義援金といったらみんな出すのですけれども、そういう団体の活動費というのにはなかなかお

まり、担架搬送の要領や一組の班員数などの確認後、都内直下型地震で被災者が多数出たという想定の下、各種団体の災害救助班の一部となって私達「災害ボランティアぐんま」の4人一組で実地訓練に入りました。医師団の診断により被災者が分類されたトリアージの要請に応じて、該当する救急医療拠点に搬送する任務です。

第二回目が始まつてすぐに、上空の雲行きが怪しくなり夕方にはまだ早いた立です。暫く木陰やテントで待機、11時から再開も足元が悪くなり時間も押していたので、所々省略して確認程度で行いました。定刻となつて、終了後のセレモニーもそこそこ今回の

金を出さない。なかなかお金が集まっていけない。そういう状況の中で、ボランティアが一番現地で頑張っている人、身銭を切っている人が、一番大変な状況に追いやられているのです。

そういうような状況もありますので、今後皆さんがやはり、おそらく地域の現場でも同じように活動資金の問題というのは大きいと思います。ボランティアにはお金がかかるのだ。それをどういふふうに工面していく必要があるのかということも、是非、今後の災害ボランティアの中で考えていただければというふうに思います。

「応急救護訓練」は忙しく終了しました。12時を回つて、前橋からのバスが公園近くの路上で待つて居るので急ぎ乗車しました。そして、つぎの目的地である池袋の「サンシャイン60」へ向かいました。ここには昼食をとるために立ち寄つたのです。学生時代の時期を近くの雑司ヶ谷公園に近いアパートに居たので、すぐ食べられる食堂で済ませ散策してみました。面影はありませんでした、40年も昔ですから。午後2時に昼食時間を終えて、首都高速道、関越道で群馬へ向かい、心地よい疲労を感じながら午後4時に新前橋駅西口の集合地点に到着して解散、終了しました。

前年度も都立小金井公園の訓練に参加、今年度は、5月に富岡市の総合防災訓練に参加しました。訓練参加は初期においては、なかなか身に付かない状態も回を重ねることによって少しは様になつてきたと思います。非常時で

も自分で判断し、先が読めるようになり、自分で考えて動けるようになった気がします。所変われば品変わるではありませんが、いろいろな状況や設定、度重ねる訓練の経験で実際に適応できる行動が身に付いたと思います。

「災害ボランティアぐんま」の個人会員となつてから、どれだけ訓練、研修、講習、実際の被災地支援作業、その他の活動を経験させてもらったことでしょうか。ここまで経験してやっと自信がもてるようになりました。大変ありがたく思っています。

無いに越した方が良いのが災害です。2年前になろうとしている東日本大震災が良い見本です。群馬は災害が少ないと言われていますが、一般的に私たちが考える所の想定外の災害はいくらでもありそうです。何度も不断の訓練を繰り返して受けることでも、どこでも災害に対する意識を持つて生活しようと思つていきます。



現在私は、町内の役員として地域に関わりを以て活動しています。640世帯1500人の町内です。避難場所の小学校を拠点に地域の防災や減災、予防を考えるヒントとなる知識や経験を養える機関として、これからも「災害ボランティアぐんま」の活動に参加しようと感じました今回の訓練でした。

**平成24年度東京都・目黒区合同  
総合防災訓練の体験記**

藤野 茂(太田市)

平成24年9月1日(土)に東京都目黒区林試公園で行われた東京都九都市県防災訓練に参加しました。東京及び近隣の県、市の合同訓練で、当日は気温33度のうだる様な暑さ、さらに突然の豪雨という状況の中で、都市における災害(地震、火災、水害、津波、帰宅困難者等)の発生、その後の起こりうる様々な被害想定のもと訓練をしました。

私たち「災害ボランティアぐんま」のメンバーは地震災害で負傷した多くの被災者の搬送に加わりました。DMATの医師、看護師、そして消防隊、警察隊、自衛隊の指示及び連携のもと救護所から各緊急拠点病院へ担架を使い搬送しました。家屋の倒壊などで負傷した人の程度は実に様々で、特殊なメイクと分かっているながらも気の引き締まる思いがしました。慣れない担架ではありましたが、負傷した人をしてできるだけ早く安全に搬送できるよう、お互いに声を掛け合いながら行動しました。トリアージポストでは状態に応じたトリアージタグが付けられますが、

次々と搬送されてくる負傷者で込み合ってしまう程でした。そんな時、一緒に担架を持つ方々が必死に声をかけているのに気付きました。「暑いけれどもう少しだからね」「がんばってね」そう言いながら首に掛けてあるタオルで何度も扇いでいました。いつの間にか私もそれに習い声をかけ、扇いでいました。

**県総合防災訓練に参加**

平成24年9月8日(土)、桐生市の渡良瀬川河川敷「さくら遊園」を会場に、平成24年度群馬県総合防災訓練が行われ、群馬県、桐生市ほか93団体が参加した。

災害ボランティアぐんまからは会員等10名が参加。群馬県南東部を震源とする最大震度6強の直下型地震が発生し、建物倒壊や火災により多数の市民が負傷したとの想定。会員は、設置された災害ボランティアセンターでのボランティア受入れや被災家屋での活動訓練など、真剣な表情で取り組んだ。



今回の訓練は、未曾有の被害をもたらした東日本大震災後に行われた大規模な訓練でした。そのような中、参加者は真剣な眼差しで与えられた役割に真摯に取り組みました。私自身、この訓練で年代を問わずいかに連携を取ることが大切なことを身をもって感じたり一日となりました。

**平成24年度群馬県総合防災  
訓練に参加して**

阿部 孝(前橋市)

9月8日(土) 県防災訓練が桐生市渡良瀬川河川敷にて自衛隊、消防隊、警察隊に加えて各種団体及び一般市民多数の参加を要して開催され、私も県災害ボランティアの一員として参加しました。

訓練は仮想被災地を想定して社会福祉協議会のもと、ボランティアセンターを設立、救援状況を確認し、手配から実行動へと貴重な体験をしました。全体で感じたことは、多くの一般市民や桐生市以外の社協の人達も多数参

加して活動している姿を見て危機管理意識が非常に高いことを肌で感じました(多数の一般市民も見学をしていました)。

私も今以上に地域の危機管理をしつかりやっていかなければいけないことを再確認致しました。

**大震災をきっかけに**

三好 亮(伊勢崎市)

テレビで繰り返し東日本大震災の悲惨な状況を見たことをきっかけに災害ボランティアに関心をもちました。担当のマッチングを終えた後は、警察や自衛隊などのオフロードバイク、ヘリコプター、テロ対策用防護服など、災害現場で活躍する様々な人たちを目の前で次から次へと見学できて勉強になりました。

今後も災害ボランティアに関心を持ち続けていきたいと思いました。

**編集後記**

東日本大震災から早くも二年が経過しました。復旧はかなり進んでいるようにも見えませんが、復興にはまだ遠い状況です。

この間、我々災害ボランティアぐんま会員もいろいろな経験と自己研鑽を積んできましたが、いざ群馬に災害が起きた時「よし、任せてくれ」と言える人は何人いることでしょうか。皆無かも知れませんが、世の為、人の為、何より自分の為、に初心に戻って、減災と災害ボランティアの備えを願うところです。

記念講演の内容をより多く掲載したことにより、活動写真が少なくなりましたことをご許し願います。(H)